

マリアの夫ヨセフの物語

2016/12/07 井田 泉

1

ヨセフはガリラヤのナザレという町に暮らす大工でした。家を建て、家具を製作し、場合によっては大きな建物も手がけます。大工といっても日本の大工のように木を中心に扱うのではなく、石を主に扱います。「ヨセフ」というのは、もともとヘブライ語で「増し加える」という意味です。

ヨセフは「正しい人」(マタイ 1:19)であったと言われます。正義感が強く、神の前に正しく生きようとする誠実な人でした。ヨセフは二十歳になる前に十代半ばのマリアと婚約しました。

ところが婚約中のマリアが身重になっていることに気づくようになりました。マリアを信じたいけれども信じられない。どうしていいかわからず、ヨセフは非常に苦しみました。考えあぐねた末、マリアのことを表沙汰にすることを避けてひそかに離縁することを決意しました。それ以外に選択はないと思ったのです。

ところがある夜、主の天使が夢に現れて言いました。

「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」マタイ 1:20-21

「ダビデの子」というのは、ヨセフの先祖(1000年も前ですが)がイスラエルのダビデ王からです。ヨセフは天使から、自分の考えとはまったく違う道を示されました。「恐れるな」と天使が言うのです。ヨセフは恐れていました。不可解な婚約者の妊娠、世間のうわさ、自分の名誉が損なわれること、マリアが傷つくこと……。しかし天使をとおして神が**「恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿った」**と言われるのです。

「恐れるな」——人間的な考えと心配と恐れは停止させられます。起こったこと、起ころうとすることは、すべて神から来ており、神が責任を持ってくださるのです。しかもヨセフは具体的な指示を与えられました。

「マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」

名付けることはその子の父として責任を持つことです。しかもその子は、「自分の民を罪から救う」。「イエス」とは「主(神)は救い」という意味です。

マタイによる福音書は次のように説明します。

「このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。『見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。』この名は、『神は我々と共におられる』という意味である。」 マタイ 1:22-23

ヨセフは眠りから覚めると、夢で聞いた言葉を神の言葉と信じて受け入れる決心をしました。神が、マリアと、やがて生まれる子を自分に託されたのです。

ヨセフは、マリアが天使ガブリエルから聞いたというお告げのことを、このときはっきりと理解し、信じました。マリアとヨセフは初めて、深い信頼関係で結ばれました。二人は一緒に、神から託された大切な使命を引き受けることを、畏れと喜びと祈りをもって確認したのです。

2

すでにマリアは臨月。身軽には動きにくくなっていました。そのようなとき、ローマ皇帝から命令が出されました。人口の調査をするから、それぞれ自分の出身地に帰って登録せよというのです。北の町ナザレから、ヨセフの出身地、南のベツレヘムまで。普通でも数日かかる遠い旅です。しかしヨセフはマリアを残していくことはできず、連れていくことを決意しました。マリアをロバに乗せ、山を越え、川を渡り、危険な道を進んでいきます。祈りつつ、進むしかありません。途中で産気づいたらどうなるでしょう。

ふと、遠い先祖のことが気になります。1700 年も昔の先祖ヤコブと妻ラケルのことです。おそらく同じこの道を彼らは北から南へと歩み、ラケルはベツレヘムの近くで男児を産んで、自分は世を去ったのです。そのことを思うと非常な不安に包まれます。しかし天使の約束は必ず実現するはずです。

10 日近くかかって、ようやくヨセフとマリアはベツレヘムに着きました。しかし泊まる宿屋がありません。マリアは陣痛が始まっています。どんなに二人は真剣に祈ったでしょう。ある親切な人が、客間は一杯だけれどと言って、居間と家畜小屋の間に場所を用意してくれました。

その晩、マリアは男の子を産みました。不思議なあたたかな光が部屋中を包んでいました。貧しい中の、特別な平和と静けさの世界でした。羊飼いたちが訪ねてきて、その子を拝みました。天使から知らされたと言うのです。

八日目、ヨセフはマリアとともに、天使が命じたとおりに、正式にその子を「イエス」と名付けました。それから数日たって、遠い東の国——今のイラクあたりでしょうか——から三人の占星術の学者が高価な贈り物を携えてやってきて、その子を礼拝しました。

神の子の父親となってこの子を守り養育する、という耐えがたいほどの責任の重さとともに、不思議な幸せをヨセフは感じていました。

それからひと月ほどして、ヨセフとマリアは幼子イエスをエルサレムの神殿に連れて行き、イエスを神にささげました。この子は神にささげられて、神から受けた使命を果たすことになるはずですが。神殿でシメオンというおじいさんに出会いました。シメオンはイエスを見て感動し、「今こそ自分は神のみもとに行くことができる。あなたの救いを見たのですから」（ルカ 2:29-30）と歌いました。

そしてシメオンがマリアにこう言うのをヨセフは聞きました。

「御覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人を倒したり立ち上がらせたりするために定められ、また、反対を受けるしるしとして定められています。――あなた自身も剣で心を刺し貫かれます――多くの人の心にある思いがあらわにされるためです。」ルカ 2:34-35

またアンナというおばあさんにも出会いました。女預言者と呼ばれるアンナは、幼子を見てこの上なく喜び、エルサレム中の神の救いを待ち望んでいた人々にイエスのことを話しました。

3

ある晩、ヨセフの夢に天使が現れて言いました。

「起きて、子供とその母親を連れて、エジプトに逃げ、わたしが告げるまで、そこにとどまっていなさい。ヘロデが、この子を探し出して殺そうとしている。」マタイ 2:13

ヨセフは起きて、夜のうちに幼子とマリアを連れてエジプトに逃げました。イエスとマリアの命を守るため、すぐに決断し行動したのです。そして数年の間、エジプトに寄留者として生活しました。

ある晩、またヨセフの夢に天使が現れて言いました。

「起きて、子供とその母親を連れ、イスラエルの地に行きなさい。この子の命をねらっていた者どもは、死んでしまった。」マタイ 2:20

そこでヨセフは起きて、幼子とマリアを連れてイスラエルに帰ってきました。しかしヘロデの息子がユダヤを支配している聞いて恐れました。しかし夢でお告げがあったので、ヨセフは妻子を連れて北の方、ガリラヤのナザレに戻ったのです。

ヨセフは大工の仕事の続けながら、マリアとともにイエスの成長を守り支えました。どの両親も経験する苦勞と心配と、また喜びがあったに違いありません。同時に、「神の子」「人々を罪から救う者」とされた子の養育には、特別の重い苦勞と祝福があったことでしょう。

ヨセフは毎年、春の過越の祭にはナザレの町の人々とともにマリアとイエスを連れてエルサレムの神殿に礼拝に行きました。イエスが 12 歳のとき、帰り道でイエスが道連れの中にいないことに気づき、マリアとともにエルサレムに引き返して探し回りました。やがてイエスが神殿

の境内で学者たちの真ん中に座って話を聞いたり質問したりしている姿を見出しました。聞いている人は皆、イエスの賢い受け答えに驚いていました。マリアがイエスに言いました。

「なぜこんなことをしてくれたの。御覧なさい。お父さんもわたしも心配して捜していたのに。」

ルカ 2:48

イエスが答えて言いました。

「どうしてぼくを捜したの。ぼくが自分のお父さんの家にいるのは当たり前だということを、知らなかったの。」ルカ 2:49

ヨセフは傍らでそれを聞きながら、「ああ、この子のほんとうの父親は神さまなのだ」とあらためてはっきりと感じたのでした。

4

ヨセフとマリアの間には数名の子どもが与えられました。けれどもそれ以降、ヨセフの名前は福音書には登場しません。おそらくヨセフは若くして世を去り、その後はイエスがマリアを助けて一家を支え、弟妹たちの面倒を見ながら、父ヨセフから習った大工の仕事を続けていったのでしょう。

ヨセフは天からマリアとイエスを、また実の子どもたちを見守り、祈り続けたに違いありません。

「正しい人」と呼ばれたヨセフは、あの天使のお告げを受け入れた時から、ただ自分の思う正義を貫くというのではなく、神を信じ神に従う人、神の願われる正しいことを実現しようとする人となりました。マリアとイエスを愛し守り、神の救いの働きを担い広げていく人となりました。

ヨセフは、あの天使が告げたように、「インマヌエル」——神はわたしたちとともにおられる——という事実を、マリアと共に深く経験した人でした。それは彼の経験だけに終わるのではありません。わたしたちにも「インマヌエル」の約束が与えられていることを、ヨセフは呼びかけているのです。

成人したイエスは、マタイ福音書の中でこのように人々に呼びかけました。「山上の説教」と呼ばれる箇所の初めです。

「義に飢え渴く人々は、幸いである、その人たちは満たされる。

憐れみ深い人々は、幸いである、その人たちは憐れみを受ける。

心の清い人々は、幸いである、その人たちは神を見る。」マタイ 5:6-8

ヨセフはマリアともに、この幸いを味わうことを許された人々だったのではないのでしょうか。